

New Materials of the Pole-top from China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45107

中国出土の竿頭飾新資料

高濱 秀

(金沢大学歴史言語文化学系元教授)

以前に私は中国の北方で発見される竿頭飾について、東京国立博物館が新たに入手した資料を紹介するとともに、その起源について論じたことがある。その竿頭飾に関して先日、中国で重要と思われる資料を見ることができたので、それを紹介して竿頭飾の起源について改めて述べておきたい。

I

今回注目した竿頭飾は、山西省侯馬、天馬一曲村の晋侯墓地から出土したものである。侯馬の天馬一曲村では、山西省考古研究所と北京大学により、多年にわたって西周時代の晋侯の墓地が発掘されており、2014年の10月にはその地に晋国博物館が開館した。博物館ではこの墓地出土の文物が陳列されると共に、発掘された9基の晋侯・晋侯夫人の墓や車馬坑が、館の中に取り入れられて展覧されている。筆者は2014年の12月初めに訪れて見学することができた。その折着目した鳥形竿頭飾は113号墓から出土したもので、青銅器などの出土遺物のなかに陳列されていた。113号墓は、初代晋侯である燹父の夫人の墓であると考えられており、墓の年代は確実に前10世紀まで遡ることになる。

鳥形竿頭飾は2点あり、同じ形である(図1, 2)。鳥形の身体部分中空で、透かしになった部分があり、籠状とも言える。鳥の下には竿に留める部分があるが、これは、一般に車馬具として知られる鑾鈴の下部と同じ形をしている。すなわち下端がわずかに広がる台形で、断面形は長方形である。側面に釘で留めるための孔がある。鳥形の身体部には、なかに金属の玉は入っていないようである。1点は頸部のあたりが壊れて修理したように見えるが、もう1点には外から見たところ修理痕は見えず、そうすると元来金属の玉は入っていなかったのかもしれない。

113号墓の発掘略報はすでに発表されているが[北京大学考古文博院等 2001]、そこにはこの鳥形竿頭飾

についての記述、写真、図はない。しかし発掘状況の図によると、2点の「銅鳥形鑾鈴」が、「玉器」、「銅円形鑾鈴」、「銅跽人」、「銅跽人轄」、「銅獸首轄」、「銅車轄」など一塊になって槨室の東北隅から発見されている。おそらくこの鳥形竿頭飾にあたると思われる。形からも、共に発見されたものから見ても、車馬具関係のものである可能性が大きい。

II

次に竿頭飾とはどういうものか、その特徴などについて簡単に述べ、その起源について、以前私が論じたことなどを紹介しておきたい。

竿頭飾とは、スキタイなどユーラシア草原地帯の初期遊牧民の文化で時折発見される青銅器である。多くのものが動物の形をしており、その下にソケットが付いて、竿のような棒を差し込むようになっている。竿頭飾が特に多く発見されるのは、黒海沿岸のスキタイ文化、ミヌシンスクのタガール文化、そして中国の北の遊牧民文化であろう。他にも西シベリアやカザフスタンなどでも発見されている。竿の先に付けるとしても、それをどのように用いたのか、その用途は、すっかり明らかになっているとは言えない。

用途を推測する上に最も良い例は、ミヌシンスク盆地のタガール文化サラガシュ期の墓で発掘された例である[Vadetskaya 1975]。これは1基の墓から4点出土しており、死者を横たえた棺台の4本の柱の上に付けられていたことが明らかになっている。しかしこの使用例が、すべての竿頭飾について当てはまるものかどうかは、まだ不明である。

中国の北方で知られている竿頭飾は、殆どが佇立した羊、ヤギ、鹿、鳥のような動物の形をしており、その下に断面楕円形あるいは方形のソケット状の部分がある。ソケットには2つの孔が開き、釘で竿に留めるようになっている。ソケット部分の側面にループの付くものもある。現在中国で遺跡出土のものとして知ら

れる例には、内蒙古中南部の速機溝や玉隆太出土のものがあり〔内蒙古自治区文物工作隊 1986, 図版 11～14, 104～106〕、共伴した遺物の年代から戦国時代後期のものと考えられる。しかし残念ながら出土状況から用途の推測できるものはない。2 個あるいは 4 個など、偶数で発見された例があるらしい。

中国出土として知られる竿頭飾には、ほかにも博物館などに所蔵されている例があるが、そのなかには、速機溝や玉隆太などで出土したものとは幾分特徴の異なるものが見られる。その大きな違いは、動物の眼の表現が、遺跡出土のものでは輪郭を凹線で表わすものが普通であるのに対し、円孔あるいは円形窪みの周囲を凸線円で囲むものがあることが挙げられる。両目が貫通した孔になっているのは、商代の北方系青銅器の刀子や剣に付けられた動物の頭の目を連想させる。このような型式のものには、シカゴ美術館 The Art Institute of Chicago 所蔵のヤギ形竿頭飾（図 3, 4）や鳥形竿頭飾（図 5）〔Andersson 1933, Pls. X-XII〕、大英博物館所蔵の鹿形竿頭飾、スウェーデン東アジア博物館のウマ形竿頭飾（図 6）〔東京国立博物館 1997, No. 131〕、ニューヨーク、メトロポリタン美術館所蔵のヤギ形竿頭飾、ヒツジ形竿頭飾などが挙げられる。なかにはシカゴ美術館所蔵の鳥形竿頭飾や、青海省湟源県巴燕峡発見のもの（図 7）〔青海省文物考古隊等 1986, 図版 1-6〕のように、身体が鈴のような籠状になるものもある。シカゴ美術館の鳥形竿頭飾には、身体に玉が入って、振れば音が出るようになっている。

遺跡出土のものと幾分異なるこれらのものは、おそらく戦国時代後期よりも時期的に早いと思われる。それは、シベリア、トゥバのアルジャン Arzhan 1 号墳から、この種の竿頭飾が 5 点出土しているからである（図 8, 9）〔Gryaznov 1980, Рис. 26〕。アルジャン 1 号墳は現在最も早い初期遊牧民文化の古墳としてよく知られており、年代は前 9 世紀から 8 世紀頃が考えられている。アルジャン 1 号墳では、墓主の木槨を中心として、丸太で作られた多くの室が蜘蛛の巣状に配置されているが、竿頭飾はその一つの室で、陪葬された馬とともに発見された。

このほかにもシベリアでは同じような特徴を持つ竿頭飾が、西シベリア、バルナウル近くのシュタブカ Shtabka から一対出土している（図 10, 11）〔Umanskii

1970, Рис. 1〕。この例は、オオシカの身体が籠状の鈴のようになっている。馬具の銜と共に出土し、竿頭飾の孔に銜の端が挿入されていたので、鑣として使用されたと考えられている。しかしスキタイ文化期に一般に見られる鑣の型式とは全く異なっており、少なくとも初めから鑣として作られたとは思えない。

このほかにも、身体が籠状になった動物が表されたものに、バイカル湖の西北イリム Ilim 川流域で出土したと言われるソケット部の短い竿頭飾がある（図 12）〔Berdnikova et al 1991, Рис. 9〕。これは身体に菱形の透かし孔が両面に 2 つずつ開いている。A. サルモニー Salmony は身体が籠状の動物を象る竿頭飾を 2 例紹介しているが（図 13, 14）〔Salmony 1933, Pl. V-2, VI-1〕、その 1 例は、イリム川流域出土例にそっくりである。また動物の角の形が異なっているが、よく似た例がギメ美術館に所蔵されている（図 15）〔Actes Sud 2003, p. 68〕。

サルモニーは球状鈴の上に鹿が立つ竿頭飾を紹介している（図 16）〔Salmony 1933, Pl. V-3〕。これはこの種の動物形と鈴との関係を示す、さらに一つの重要な資料であろう。よく似た竿頭飾が、黒海沿岸のグブスカヤ Gubskaya でも出土している（図 17）〔Il'inskaya et al. 1983, c. 46〕。

竿頭飾を含む一括埋納物が、シベリアのバイカル湖西側のコルスコヴォ Korsukovo で、鍔に納められた形で発見された。1980 年にイルクーツク博物館に収められたのは、鍔のほか、2 点の古式の鹿形竿頭飾、身体が透かしになった 2 点の動物形製品、動物付鉤状製品、単純な鈴付きの竿頭飾である（図 18～24）〔Berdnikova et al. 1991; Zuev et al. 1995〕。鹿形竿頭飾の鹿の身体には菱形の孔があり、籠状の鈴のようになっており、イリム川出土のものなどとよく似ている。古式の竿頭飾と鈴付竿頭飾が伴っているのも重要である。この一括埋納遺物の年代には、2 つの説がある。ベルドニコヴァ達は前 7－6 世紀と考えるが、ズエフなどは、前 9 世紀後半から 8 世紀前半と考えている。

商代後期の遺跡である山西省の保徳林遮峪では、鈴の付いた竿頭飾のようなものが出土している（図 25）〔呉振録 1972, 封底里 5〕。これは、そのソケット部にループが付いており、北方系の竿頭飾と共通している。おそらくこの例が、竿頭飾関係の例のなかで、最

も早い例と見做すことができよう。

黒海沿岸のスキタイ文化でも多くの竿頭飾が知られているが、形式的に見ると中国北方の竿頭飾とは殆どものが一致しない。立体的に動物の全身像を表したものはきわめて少なく、グブスカヤ出土の竿頭飾は例外的なものである。また下に述べる球形の鈴付竿頭飾も早い時期にしか見られない。しかし、スキタイ文化の竿頭飾は、殆どのもが他地域のものと異なるとはいえず、ユーラシア草原地帯全域の竿頭飾と無関係とは考えられない。おそらく共通の起源を持つてはいるが、その後分かれて、他の地域とは無関係に発達したのであろう。

年代の早い保徳林遮峪の鈴付竿頭飾を考えると、竿頭飾は初期遊牧民文化に多く知られるものではあるが、元来中国周辺の商代の文化に起源をもつ可能性があると考ええる。そして振れば音を出す籠形の鈴と密接な関係があるといえよう。

III

晋侯墓地 113 号墓の例は、中国北方の竿頭飾と同種の籠形の身体を持つ動物像が、鑾鈴の鈴部分の代わりに付けられたものである。北方の竿頭飾の影響を受けて作られたとあってよいであろう。これは既に紀元前 10 世紀に、籠形の動物像を付けた竿頭飾が北方に存在したことを物語っている。アルジャン 1 号墳は前 9 世紀まで遡りうる古墳であり、これはそれほど意外なことではない。

先に竿頭飾について論じた時には、ピルスベリー・コレクションの 2 点のウマ形竿頭飾を引用した[Karlgren 1952, Pl. 91]。これらは、鏤の具合などから安陽出土の商代後期のものと推測されてはいるが、発掘品ではない。北方文化と中国文化の交流を示す確実な動物形竿頭飾の例としては、この初代晋侯夫人墓から出土したものが最も早いといえよう。

コルスコヴォで出土したような鈴付きの竿頭飾は、中国の西周時代の墓から出土した例がある。

西周時代前期の陝西省宝鸡市石鼓山 1 号墓からは、4 点の籠形の鈴付竿頭飾が出土している(図 26) [石鼓山考古隊 2013a ; 石鼓山考古隊 2013b ; 陝西省考古研究院等 2014, 9 鑾鈴]。残念ながら、出土状況の詳細は不明である。頂部に小さな孔のある突出部があり、鈴の下には一段細い部分がある。ソケット部分の

下部には竿に留めるための小さな孔がある。石鼓山の西周墓群は西周前期とされているが、商末周初の可能性も否定できないと言われる。西周前期でも早い頃であらう。

甘肅省崇信於家湾 115 号墓では、4 点の鈴付き竿頭飾が出土している(図 27) [甘肅省文物考古研究所編著 2009, p. 87, 図版 27 - 2 ~ 5, 図 77 - 2 ~ 5]。全体の形は石鼓山のものとほぼ同様の形をしているが、頂部に小さな鱗のようなものが 2 つ付いた変り形である。墓の埋め土の中のほぼ同じ高さから、この 4 点の鈴付き竿頭飾、1 点の鑾鈴、車書などが発見された。車馬具の一つとして出土したと言えなくもないが、確実ではない。この 115 号墓も、西周前期の墓と考えられている。

最近知られたこの 2 つの例から、鈴付竿頭飾の年代が、保徳林遮峪の商代後期から西周前期まで広がったことになる。コルスコヴォの一括埋納物の年代は、鈴の形からも西周前期のほうに近いと言ってよいであろう。

兵庫の黒川古文化研究所には、中国出土と考えられる鈴付竿頭飾が所蔵されている(図 28)。これは鈴のあたりの形は上に挙げた西周前期のものと近いが、下部に開けられた三角形の孔は、大き目ではあるが、コルスコヴォの鈴付竿頭飾や、下に述べる北カフカスの初期スキタイのものと共通する。

石鼓山の墓地では、1、2 号墓は墓の構造などは判然としなかった。しかし 3 号墓は科学的に調査され、希少な禁や、見事な方彝や卣を含む多くの青銅器などが出土した。青銅器の銘文から、この墓地は戸氏の家族墓地と考えられている。この 3 号墓からは、高領袋足鬲が出土しているが、これは劉家文化と呼ばれる文化に特有のものであり、それによりこの墓地がいわゆる姜戎に属することが推測されている。また副葬品を納めた多数の龕のある 3 号墓の構造からも、この墓と劉家文化との関係が窺われる [石鼓山考古隊 2013b, 23 頁 ; 王顯等 2013, 82-84 頁]。そうすると、この墓地と北方の異民族の文化との関係は納得できる。於家湾にしても、周辺に戎狄や羌戎などの民族がおり、それらの文化要素が入ってきていても不思議ではないことが、指摘されている [甘肅省文物考古研究所 2009, 144-145 頁]。

鈴付竿頭飾は黒海沿岸の初期スキタイのクルガンか

ら出土している。スキタイ文化最古のクルガン群の一つである北カフカスのケレルメス 2、3、4 号墳である（図 29～31）[Galanina 1997, Табл.44-44, 67, 300, 301, 302]。ほかに、北カフカスのマイコープの博物館にも似た鈴付竿頭飾が所蔵されている（図 32）[Volkov 1983, Рис. 1- 3]。これらは、中国西周時代のものと比較して、ソケット部分に比べて鈴が幾分大きく、鈴の下的一段細くなった部分がない。ソケット部の下部に三角形の孔がある。これらの鈴付竿頭飾は、初期遊牧民文化の始まりの頃に、東方の文化の影響が強かったことを示している。

鈴付竿頭飾の分布は、いわゆるクバン式冢のそれとよく似たものといえるであろう。冢の場合も、最古のものが山西省の商代の遺跡から出土し、西周時代の墓でも発掘されている。そしてモンゴル、アルタイや中央アジアで見出され、北カフカス、クバン地方のケレルメス・クルガン群で発見されている。東から西への流れを認めてよいであろう。竿頭飾はまだ中央アジアやシベリアでは発見されていないが、類似した分布を示すことが予想される。動物形の竿頭飾もこれに準じたものと考えられるであろう。

引用文献

- 王顯、劉棟、辛怡華 2013 「石鼓山西周墓葬の初歩研究」『文物』2013-2, 77-85 頁。
- 甘肅省文物考古研究所編著 2009 『崇信於家湾周墓』文物出版社。
- 吳振録 1972 「保徳県新發現の殷代青銅器」『文物』1972-4, 62-66 頁。
- 青海省文物考古隊、湟源県博物館 1986 「青海湟源県境内的卡約文化遺迹」『考古』1986-10, 882-886 頁。
- 石鼓山考古隊 2013a 「陝西宝鶏石鼓山西周墓葬發掘簡報」『文物』2013-2, 4-54 頁。
- 石鼓山考古隊 2013b 「陝西省宝鶏市石鼓山西周墓」『考古與文物』2013-1, 3-24 頁。

- 陝西省考古研究院、宝鶏市文物旅游局、上海博物館 2014 『周野鹿鳴—宝鶏石鼓山西周貴族墓出土青銅器』、上海書畫出版社。
- 内蒙古自治区文物工作隊 田広金、郭素新 1986 『鄂爾多斯式青銅器』北京 文物出版社。
- 北京大学考古文博院、山西省考古研究所 2001 「天馬—曲村遺址北趙晉侯墓地第六次發掘」『文物』2001-8, 4-21 頁。
- 高浜秀 1993 「オルドス青銅器竿頭飾について」『MUSEUM』1993 年 12 月号 (No. 513) 4-19 頁。
- 東京国立博物館 1997 『大草原の騎馬民族—中国北方の青銅器』。
- Actes Sud/ Mission archéologique Française en Mongolie 2003 *Mongolie. Le premier empire des steppes*.
- Andersson, J. G. 1933 Selected Ordos Bronzes, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* No.5, pp.143-154, Pls.I-XVI.
- Berdnikova, V. I. et al. 1991: Бердникова, В. И., В. М. Ветров, Ю. П. Лыхин, Скифо-сибирский стиль в художественной бронзе Верхней Лены. *Советская археология* 1991-2, сс.196-206.
- Galanina, L. K. 1997: Галанина, Л. К., Келермесские курганы. Степные народы Евразии. Том 1. Москва.
- Gryaznov, M. P. 1980: Грязнов, М. П., Аржан. Ленинград.
- Il'inskaya, V. A. et al. 1983: Ильинская, В. А., А. И. Тереножкин, Скифия VII-IV вв. до н. э. Киев, Наукова думка.
- Karlgren, B. 1952 *A Catalogue of the Chinese Bronzes in the Alfred F. Pillsbury Collection*. Minneapolis.
- Salmony, A. 1933 *Sino-Siberian Art in the Collection of C. T. Loo*. Paris.
- Umanskii, A. P. 1970: Уманский, А. П., Случайные находки предметов скифо-сарматского времени в Верхнем Приобье. *Советская Археология* 1970-2, сс.169-179.
- Vadetskaya, E. B. 1975: Вадецкая, Э. Б., Тагарские погребальные ложа. В кн.: *Археология Северной и Центральной Азии*. Новосибирск.
- Volkov, I. G. 1983: Волков, И. Г., Скифские прорезные наперья из Прикубанья. *Археологические сборник*. 23, сс.57-59.
- Zuev, V. Yu. et al. 1995: Зуев, В. Ю., Р. Б. Исмагилов, Корсуковский клад. В кн.: *Южная Сибирь в древности*. Санкт-Петербург, сс.67-75.



図 1. 天馬—曲村 M113 出土

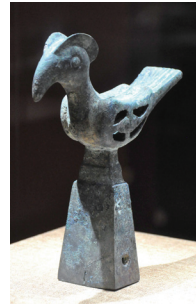


図 2. 天馬—曲村 M113 出土



図 3. シカゴ美術館所蔵



図 4. シカゴ美術館所蔵



図 5. シカゴ美術館所蔵

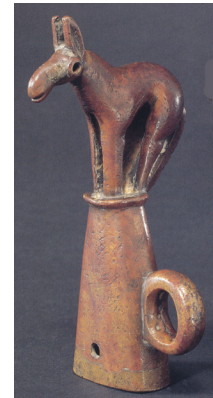


図 6. 東アジア博物館所蔵



図 7. 巴燕峡出土



図 8. アルジャン I 出土



図 9. アルジャン I 出土



図 10. シュタプカ出土

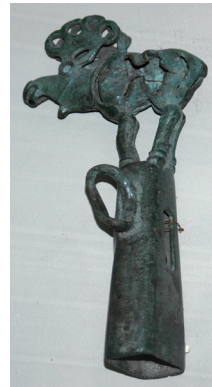


図 11. シュタプカ出土

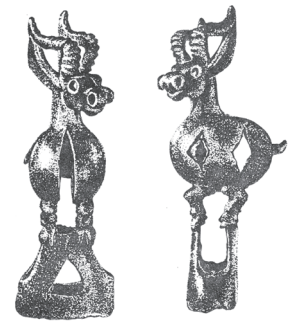


図 12. イリム川流域出土



図 13. 前 C. T. Loo 収集品



図 14. 前 C. T. Loo 収集品



図 15. ギメ美術館所蔵



図 16. 前 C. T. Loo 収集品

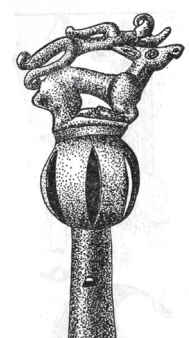


図 17. グブスカヤ出土



図 18. コルスコヴォ出土

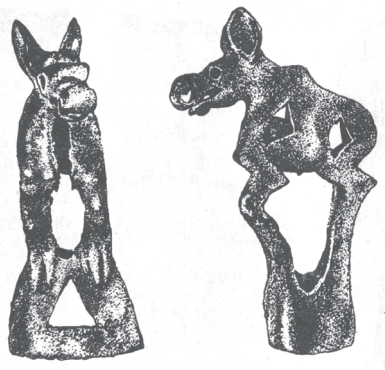


図 19. コルスコヴォ出土

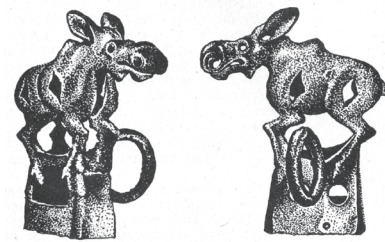


図 20. コルスコヴォ出土

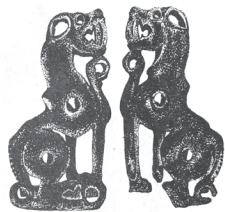


図 21. コルスコヴォ出土



図 22. コルスコヴォ出土



図 23. コルスコヴォ出土



図 24. コルスコヴォ出土



図 25. 林遮峪出土



図 26. 石鼓山 1 号墓出土



図 27. 於家湾 115 号墓出土



図 28. 黒川古文化
研究所所蔵

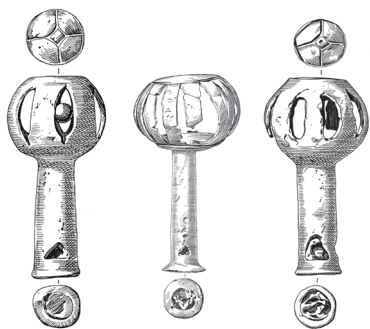


図 29. ケレルメス 2 号墳出土



図 30. ケレルメス 3 号墳出土



図 31. ケレルメス 4 号墳出土

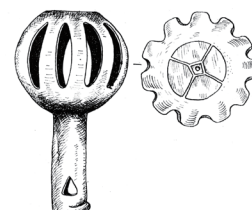


図 32. マイコプ博物館所蔵